はくぶつかんの部屋 23

～郷土の偉人・山田真山～

天井が、見上げるように高い部屋で、白いひげを生やした、白い作業服姿の小柄な老人が、大きな像を前に、懸命に作業をしている。四〇～五〇年前に、普天間でそんな光景を目にした記憶のある方も多いのではないでしょうか。この老人は、山田真山（一八八五～一九七七）という芸術家です。

真山は、現在の那覇市に生まれました。幼少期に父を失い、苦労の連続でした。しかし、もともと手先が器用で、絵を描くこと、物を作ることが得意であったので、東京美術学校（現在の東京藝術大学）で彫刻と日本画を学び、文部省美術展覧会や帝国美術院展覧会などで入選を重ねます。さらに一九二五（大正一四）年には、一流の画家の作品が展示される明治神宮聖徳記念絵画館に、首里市が奉納する壁画「琉球藩設置」を描く画家に選ばれました。

真山は戦後、収容所での暮らしを経て、普天間に自宅とアトリエを構え、そこで数々の作品を作り上げていきます。国道五八号伊佐三叉路に建つ「交通安全之塔」、森川公園の天女のレリーフは、普天間に移り住んだ真山が、かかわった作品です。

のちに真山は、平和祈念像の制作に取りかかります。戦争で息子を亡くした真山の、世界平和を祈念する思いが込められていましたが、完成を見ることなく、九二歳でこの世を去ります。その後、真山の遺志は、お弟子さんが受け継ぎ、現在の糸満市の沖縄平和祈念堂に安置される「沖縄平和祈念像」となって実現したのです。

ありし日に、この宜野湾市で制作に励んだ偉大な芸術家の、市内に残る足跡をたどってみてはいかがでしょうか。

普天間のアトリエに残る
平和祈念像の原型

1965年制作の
「交通安全之塔」

【お問合せ】市立博物館 ☎870－9317
入館料無料となっておりますので、
お気軽にご来館下さい。

茶ぐぁーゆんたく 128

思い出のシアター

12月1日は、日本で初めて映画が公開されたのを記念して『映画の日』になっています。数ある趣味の一つとして「映画鑑賞」が上げられますが、かつて宜野湾市に映画館があったのを御存知でしょうか。

終戦後の映画館は、露天でテントや板囲いの粗末な建物から始まりました。昭和35～36年頃の宜野湾村の人口が約3万人で、近隣市町村からの買い物客で賑わっていた普天間には、1956（昭和31）年1月に開館したグランド・パレスを始め、普天間琉映、普天間沖映、普天間スカラ座、開放地琉映の5つの映画館と、普天間以外に宜野湾劇場、大謝名劇場と2つの劇場がありました。

▲普天間三叉路近くにあった
普天間琉映(左奥の建物)

当時の映画は、大衆娯楽として人気があったので、グランド・パレスでは開館3年目に、この時期本土でも使われ始めた完全自動制御装置の最新式映写機を、沖縄で最初に導入し、全島の映画館主を集めた映写会を行ったそうです。

しかし、映画興行も最盛期を過ぎると、レジャーや趣味の多様化、テレビ人気に押され、1980年代までに宜野湾市内の映画館は、すべて閉館してしまいました。

映画の日には、映画館があった事を知る方も知らない世代も普天間周辺を散策しながら、その頃の様子を想像してみるのも良いのではないでしょうか。

▲放課後の学生達で賑わう
グランド・パレス1958(昭和33)年

※写真は「写真集ぎのわん」より

『宜野湾市史』への問合せ
文化課 市史編集係（市立博物館内）
☎870－9317